

卷頭の言葉



真理と人格

どんなに立派な真理を教えるにしても、教える人に、その真理を実践している人格がなければ、所詮、折角の教えも馬耳東風、何の力にもなりません。却って聴く人の反感さえ貰うものです。

お釈迦さまの教えにしても曰蓮聖人の教えにしても、その真理は、これを体得実践されたお釈迦さまの人格、曰蓮聖人の人格を通して、今日なお輝しい光、強い力として私たちを導いています。眞理——それは無人格的な冷いものではなく、人格を通し人格につゝまれ、あたかも太陽の光のように不滅に輝く、温い無限の力をもつものです。

「白象」

鷲峰 2月號 目次

オ2卷・オ2号・通巻オ8号

真聖と人格		1
スマスの写真	日高 江里子	3
テクノボウの祈り	榎本 邦子	12
信仰体験談・奇蹟	清水 英雄	22
出家の動機		
お邊日は生きている	浜島 法立	32
王舍城と五大山		44
仏知と業苦	日高 象	31
何のための信仰	高森 和吉	21
感謝できる者の幸運	田嶋 弘隆	30
詠嘆の声	石橋 邦	11
無量義は一法より生ず	三田 斎枝子	52
信仰相談室	中西 邦郎	
創価学会はどうなるか	日高 白象	54
費助会員会友紹介		65
九州行脚布教紀行予告		43
身延山青年行学講習会案内		64
編集後記		66

題字・身延山法主藤井曰難院下

表紙・大阪東洋印刷社印刷業者

表紙写真・インド靈巖山へ渡る身延山金剛枳尊像

カット・身延教報社提供

シュバイツァー博士を写した



スミスの写真

自己投入、そこから
眞実の道は開かれる

日 高 江里子

アサヒカメラという月刊の写真雑誌があります。その中にランフのそばで執筆しているシュバイツァー博士の素晴らしい写真がありました。

この写真は世界一流の写真家といわれるエーリッシュ・スミスが一九五四年アフリカのランバレネで写したものでした。

雑誌の写真説明には、

「この作品はライフ誌に掲載されたものの中でも最も感銘の深いもの、一つだという。仕事を没頭している博士を粗末なランプによってアクセントをつけて写し、型にはまつたポートレートでは不可能な博士の人格までを物語る作品にしている」と激賞し、つづいてスミス自身の言葉を次のよ

うに紹介していました。

「私は被写体を把握しようなどとは考えない。私自身を被写体に入り込むのだ」

私は、この言葉に接した時、思わず身ふるいするような大いなる感動を覚えずにはおられませんでした。

そしてスミスの言葉とシェバーヴィルの写真とを交互に、何度も何度も読み入るように見返し読み返えして、日、更に感動を深くしだことでした。

II

でも同じように言えるのではないでしようか。般にスミスの言葉の中の「被写体」という文字を、法華経信仰の対象である「久遠実成の本仏妙尊」とか、或はその世界である「大マンダラの実相法界」という文字に置きかえてみますれば、

「私は久遠実成の本仏妙尊（或は大マンダラの実相法界）を把握しようと、は考へない。私自身を久遠実成の本仏妙尊（或は大マンダラの実相法界）に投入するのだ」

という、ことになるのです。

思うにスミスのこの言葉は、そのまま私たちの法華経信仰の一向あれ

III

大抵の人々は、往々にして自己中心的で、ものを見、ものを考え、そして行動しがちなものです。

人を愛するにしても自己本位であり自分の立場をはなれ、相手の立場にならって、相手を理解し、いつくしむということは稀です。

だとえ死ぬほど真剣に愛していくと相手の立場になつて相手を理解するといつ、「ことなくことは、「真愛の愛」といふことは出来ません。

世の中と、そうした「愛の真実」が失しあわれ、自己本位の「愛と憎しみの相剋」がひとくなればこそ、

かれ、観音さまが身を三十三身に変えてまで、それくの人の立場に切り切つてその人を理解し、いつくしめ、救うという「愛の悲願」が尊ばれる所以であります。

「愛は惜みなく尊う」

とは島武郎の言葉ですが、尊いあり専われあう愛、それは如何に生命を燃焼させるものであつたとしても、所詮、自己本位の立場を固執した対立的なものであり、愛の熾烈は立場の対立を激化して、遂にはみずからぼろんに行く日か日ないのです。

IV

愛情の在り方、それはむしろ

「愛は惜しみなく捧げる」

といふことであり、その戦身は相手の立場になつて相手を理解することから始まらねばならぬ、といつことは申すまでもありません。

想思相愛といふ言葉もありますが、それがそれ／＼の立場でなされるものでなく、互に相手の立場に立つてなされるならば、本当につるわしいものとなりましよう。

理解なき愛はありません。そしてその理解は自分の立場で理解するのではなく、相手の立場になつて理解するのです。

相手の立場になるということは、相手の中に入る、ことであり、その入り方は、自分の立場と相手の立場の両方に両般をかけているよう中途半端なものでなく、また複数べりに入るように平面的なものでなく、あだかめ断崖絶壁へ飛び込むように、おのれの立場をもなしくし、全身全靈をあげて相手の中に自己を投入する、ことです。

こゝには、やはや彼我の距離もなければ対立もありません。ミルクに砂糖を入れてようく大海に河の流れ入ったように、眞実一味の世界がくりひろげられます。

V

茶道にしても華道にしても、また歌の道にしても、その中に自己を殺入してこそ、その道の極地が開かれるものだと思います。

茶とい、華とい、歌とい、これらにあい対した自分の立場を離れずといひてその間の作法、技術を如何に参練し駆使しても、この限りにおいては、所詮形ばかりのテクニックに終つてしまい肝心の茶の心・華の心・歌の心というものを活かすことさえ出来ず却つて、それを殺してしまふ結果になるのではないかとしよう

か。

自分の立場をはなれて、茶の心に切り切つた時、自分が茶を立てる日なく、茶そのものが自分をして茶を立たしめ、華の心になり切つた時、自分が華を弄けるのではなく、華そのものが自分をして華を弄けしめ、歌の心になり切つた時、自分が歌を歌うのではなく歌そのものが自分をして歌を歌わしめるというその道の真髓が開かれまへりましよう。

勉強するにしても仕事をするにしても、この道理に背りはないと思います。よい成績をあげようと対決で

もするかのようにあせるよりも心身
その中に投入する時、勉強か自分をして
して勉強せしめ、仕事が自分をして
仕事をせしめて、努力も苦にならず、
却って楽しく、そして予期以上の成
績を得ることが出来るのです。

エーラン・スニスガシュバイツア

ー博士を撮影するに当つて、その被
写体を自分の立場で把握しようと
とは考えずと、それまで尊尊として來
にすべての技術や条件をも超越し、

自分の立場を離れ、心身を被写体の
中に没入したれば、こそ型にはまつた
ポートレートでは不可能とされるシ
バイツァー博士の人格までも、一枚

の写真の画面の上に底光りするほど
見事に浮彫することが出来、またラ
イフ巻に掲載されても、それまでの
ライフ編集史上最も感銘の深い写真
の一つとして歎賞されるに至つたの
でした。



由すまでもなく仏教とは、仏陀正
観の境界と、これに到達する道を教
えたものです。

そこで仏教を傳教する者は、仏陀
正観の境界をめざし、これを説教把
握しようとして、八万法藏の圣典の
中に詠きあかされていいる多くの仏道

を、それ／＼の根柢に立て、時代に応じて挑戦し、厳しく実践修行しながら、一步一步と前進し向上して行きました。

少くとも日蓮聖人以前における法華聖の信仰もまたそうでした。一切衆生悉可仏性」の理によつて、自己本具の仮性を確信し、「の仏性用顯のため萬教くすぐれに法華聖を地図と聞き、教と讀んで、真也実相の用を仰ぎながら、正蓮の跋諭をよじ登つて行つたのです。

それは写真家スニースがみすから誠めた言葉の中にもあるように、被写体を理によって自己的の立場で把握じ

ようとしたこと、相通する世界をはなかつたでしようか。

所が日蓮聖人においては、スニースがシユバイツァー博士を撮影するに当つてその被写体の中に自己を投入する、ことによつて、不可能とされる写真の上にまでシユバイツァー博士の人格を写し現わしたように、それまで完璧のものと叫ばれていた仏陀正覚の顔として真也実相の理と久遠の本仏教尊の生きた人格の中の躍動する光明として術ギ、まだこれまでの仏性用顯という自己中心的な立場を放下して、自己現在の全身全靈をそのまま生きた本仏教尊の一念（大

マンダラの実相法界の中に投入することによつて大いなる本仏教尊の大慈あふる人格につゝまれながらその実相正覺そのもの、大光明を血肉として直覺される人間菩薩の告仰を宣示されたのです。

これが、もはや法華三昧お題目より実相覺へ至る地圖をもなげれば

は故であります、すなはて自己本具の仮性を開闢する手段でもなくして、本仮

教尊の因行果應の二法そのものであり、これを信奉する者の生命を全般としめる一私業であったのです。

またそうであればこそ本仏教尊の全人格の大功徳は、水も漏さず信

奉する者に直接され、アキハモのまき本仏教尊の裏の皇子、本化堪浦の菩薩として昇華されて行くのです。肝心なりことは、法華空と自分の立場を堅持するのではなく、本仏教尊の立場において堅持せしめられている自己を見見する、ことではないでしようか。

VII

自己投入・それは人間覺悟の上においても、芸道の上においても、一枚の写真を写す上にても、人間生活のすべて上において大切なことであるから真実の道が始めて廟か

れで来るという、ことを思い知れば知るほど、今こそ日蓮聖人の法華經信仰が、すべての面に浸透して行かね

読者の声

正月等ほとどの偶も、年裏にふさわしく充実して、だいへん感動です。

とにかく、特と私心に深く決意しました。特と私心に深く決

わかりやすく、記事として御掲載下さりますれば、誠に幸いに存じます。
甲府市 三 邦 斎 佐 子

『註』このほか多くの「読者の声」を頂きました。厚くお礼申上げます。今後とも毎号最後の御感想、事でございました。なお編集上、創価学会よりも身延山、こそ、日蓮大聖人との御精神を継承していく日高白象師が「日蓮聖人と身延山根本的な縁山である」ということを、

はならぬことと、スニスの御業を通じて痛感させられました。

オ一回

デワノボウの祈り

「雨ニモマケズ」の詩の中に
宮次賀治の無限の祈りの声が
聞えて来る



奈良学芸大学三年
榎本蓮子

雨ニモマケズ
風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ
丈夫ナカラダヲモキ

破ハナク

決シテ頃ラズ

イツモシツカニワラツテヰル

一日玄米四合ト

味噌ト少シノ野菜ヲタベ

アラユルコトヲ

ジヌンヲカンジャウニ入レズニ

ヨクミキ・シワカリ

ソシテワスレズ

野原ノ松ノ林ノ墓ノ

小サナ薰アキノ小屋ニヰテ

東ニ病氣ノコセモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ箱ノ家ヲ貰ヒ

南ニ死ニナウナ人アレバ

行ツテコハガラナクテモイイトイビ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイビ

ヒテリノトキハナミタラナガシ

サムナノナツハオロオロアルキ

ミンナニデクノバウトヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

フタシハナリタイ

南無迦叶行菩薩

南無上行菩薩

南無多宝如來

南無妙法蓮華經

南無觀世音菩薩

南無地藏王菩薩

南無釋迦牟尼佛

「雨ニミツケス」といえば言次實

治、宮治賀治といえど、「雨ニモミケ

ズ」といわれるほど、この詩は賀治

の代表的なものとして、全国の小学生

にも中学生にも親しまれており、

今や、この詩を知らない者はない、

といわれるくらい有名なものとなつ

~111~
て い ま す 。

ところが、この説が、実は圓翁の死後はじめて人々に知られるようになつたものであるという、ことや、圓翁自身が熱烈な法華經の信奉者であったといつて、そしてこの説が圓翁の教説なり祈りによってうたいあはられたものであつたといつて、ひとつはあまり知られていないようです。

島地大等は盛岡の願教寺の住職でした。そして毎年のよつと願教寺で慶應義塾大学といつて仏教講習会を開いていました。

大正四年四月盛岡高等農林学校へ
圓翁は大正三年、二十九の或る日
棚から落ちて来た法華經を手にして、
身ぶるいするよつて『感動』をおぼえま
した。

この法華經は、當時天台教學の權
圓翁は大正三年、二十九の或る日
棚から落ちて来た法華經を手にして、
身ぶるいするよつて『感動』をおぼえま
した。

農林学校の校舎の裏の林の中で、
法華經を誦したり、剃髪坐禪する
賈若の姿が見つけられたのも、この
ことでした。

大正九年五月、二十九方の時、田
中哲堂が主宰している国社會に入会
しました。そしてその年の冬、十二
月の末から町内の寒修行にも廻り始
めました。

年が経て、賈若は二十六才になりました。
寒修行は暮れからなお続い
ていきました。その寒行中賈若は父に
一家の改宗をさせました。

といつのは父の政次郎が淨土真宗
安樂寺の相家總代をし、賈若にも四

才の頃から真宗至典の「正信偈」や
「白骨の文章」と譜誦せしめるほど
熱心な念佛の信者であつたからです。
勿論、更なる拒絕にあいました。
これが賈若の生涯を大きく方向づけ
る契機となりました。

賈若は自分一人で法華經を実践
する信仰生活に入ることに決意して
家出しました。そして単身上京しま
した。大正十一年一月二十三日のこと
です。

上京した賈若は毎日筆耕と校正で
生活費を捻出し、夜は国社會に入奉仕
しながら日に三千枚の原稿を書くと
いう、超人労る努力をつづけました。

國社會の高知是智穂のすゝめもあり
つて文芸を通して大乘聖典の真意を
ひろめるべく法華至文學の創設に生
涯を捧げんと決意したのは、上京し
て間もない二月の頃のことでした。

「これからは宗教は藝術です」

「これからは藝術は宗教です」

とは、當時の燃え沸るような眞治
の信念だったのです。

然し、やがて病魔に犯され、父と
迎えられて故郷へ帰ることをよぎな
ぐれました。

眞治は技術としても、農家を一軒
一軒足まめに歩きながら指導に専念
しました。

故郷での眞治は、大正十一年から
大正十五年とかけて、農学校の教鞭
をとりながら農村の指導に当りました。

その年の九月十九日眞治は農民の
幸福を願えは、「そ我が子の健康を気
遣う母のいさめもきかず」と上京しま

生徒と語りあい、農民と語りあつ
たこの四ヶ年こそ、眞治の生涯中、
最も充実し文学的とも最も高揚した
時期でした。

申します。

した。ところが東京に着くと同時に
肺炎急発し、みだり倒れてしまつた
のです。

一の賀賀治は三十六才を一歳と算
悟して父母へ遺言状をしたためまし
た。

九月廿一日

賀治

父上様

母上様

この一生の間、どこのどんなんす
然も受けなじむくな事いゝ處をい
たゞきながら、いつも我次が、お
心に背きどうとう、「んな」ことによ
りました。

今生で万分の一もつこむお返し
できませんでしてさう思ひますと
次の生、又その次の生で、「報じ
いたしたいと、それのみ念願い
よ」となりました。

賀治は、老齢の状態であつても、
お父の政宗、一家の政宗は養つて
いたのです。

幸い「命ととりとめた賀治は政宗
へ第4次家の二階で病める身を養う

どうか信仰とじうのではなくて
もお題目で私をお呼び出してください
い。そのお題目を總えずおわざ申
上げ、お答えいたします。

昭和八年賀治が三十八才の秋、九月十九日より三日間町に秋の大祭がめぐつて来ました。

十九日の夜賀治は家の門口まで出て神樂の通るのをおがみ、今は絶筆となつた句を書きしるしました。

病のゆえにもくちなん命なり

みのりに棄てはうれしからまし

二十日の夜一人の農夫が来て棺灰や肥料のことについて相談しました。賀治は痛苦に絶え、しかも堪えんとする意志で相手と接られないよう気遣いながら、二時間とも亘つて親切に指導しました。

それは八十才のお叔母さまが二月

十五日の夜半、最後の弘弟子と互つたスバドラ尊者のために最古の説法をされた、その音色も健在しめるものがありました。

翌る二十一日の午前十一時三十分二階から裏々とした賀治の唱題の声が聞えて来ました。

「南無妙法蓮華經 南無妙法蓮華經」
密会わせた家族の者は、両親も弟妹も一勢大ハツとして急いで階段をかけ登りました。賀治は病の床の上に端坐、合掌し、毅然として唱題を続けていました。

やがて賀治は筆と紙を用意した父政次郎に対して静かに、しつかりし

大講義で口述しました。

国説法華經を一千部印刷して知己友人、有縁の人々に分けること、本の表紙は赤と、巻末には次の文書を記入することとした。

今夏、私たゞ三度の生事は、この間あなたのお手前で届け、そらくその中にある心懐くふれてありますかが無く進に入られることをお願いする外ありません。

昭和八年九月二十一日

臨終の日に於て 宮沢賢治

この法華經こそ大正三年、賢治が二十九の時間から暮ちて來たのを手元にて、身ぶるいするような感動を

覚えしめながら遂にその生産の方向を決定するに至らしめた島地大等編纂の法華經、それを原本とするものであるのです。

法華經と念佛の相違から、信仰に關しては、あまりにも少なくてある。たゞ政次郎もこの時はじめて圓治の信頼態度の立派さに、えました。それは圓治の三十八年の生涯において後にも先きにもない唯一度の父の高弟でした。

（）すがた圓治も嬉しそうでした。心は静かでした。この孫子に安心して父も弟も妹も次々に二階をおりて行きました。あとには母が一人残っ

~20~
ていました。

黙治が水を飲みました。母が娘の
みに一杯はい、た水を手渡しました。

黙治はおいしそうに喉を「クン／＼
ならしながら飲みました。

「ああ、い、氣持だ」

そういうつて黙治は、枕もとからオ
キシフルをしたして腕首縛を取り、
自分で手から首、そして体中をきれ
じに拭きました。ふき終って、はじ
めて体を床に下へたえました。

「ああ、い、氣持だ」

また云いました。母も安心して階
下へ行こうとしました。そして、ふ
と黙治をふりかえりました。この時

今しも深い眠りに入るかのように、
黙治の手から、滑っていましたオキシフ
ルの糸がほろりと落りました。

「娘さん、黙さん」

母は黙治の名を呼びました。然し
黙治は、二度と答えるようとはしきら
んでした。既に午後一時三十分。

これが生涯を法華経文学の創設に捧
げた青年宮次黙治の最終だったのです。

黙治の死後、遺族が部屋をかたず
ける時、それまで黙治がやすんでい
た蒲団の下から、ポケット用の一冊
の手帳が出て来ました。

手帳の中には、慶治が療養中、通

き遊る跡地をめぐつたにハシビツの
あとが、やへこりと綴られていまし
た。

それは法華經西以元の世界をうた
いあけに輝くいつた跡地たつたのです。
そして慶治の慶應三十耳、今日ちお
大入院も平復したすべての人々へ窺
しきれ、すべての人々の目にたまはれて
いるあの「西ニモマケズ」という
慶治の代表作は、この「最後の手帳」
の第五十頁から第五十九頁にかけて
綴られていたものでした。

何のための信仰

お寺で信頼座説会がありました。

その時次のよだな慶風がありました。

「私は今までに信頼して来ました

が最近何のために信頼してくるのだ
ろうと思ひ至らつたまづきました。
一休師のために信頼するのですか。
或る人が答えました。

「無神といつもの」、本来十日間の間には
全く神なしといつられるのです。四方の業、家
業の業、鄰族の業大きべくいえは民族、人種
の業、人類の業をつづく人間の業苦を感ずる
在らば、何のためとづつことであるから、信
仰せずにはおられなくなるでしょつ」



歌舞伎體験談



これは一青年の生と死の
彷徨の記録である

清水英雄

へ 】 ノ

郷田義宣君（京都市中京区壬生御田町二一、今
年平安高卒）は、お盆の八月十五日、一家そろつ
て父のいなかへお盆の墓まいりに行つた。

お墓まいりをすませてから、友人のところへ遊び
に行つた。その帰りに友人よりかりてキーナオートバイが、アレーナ故郷のためにスリッフル、あつ
というまた古風にげきとつ、渾死の重傷をおつ
しまつた。

全身血まみれ、意識不明のまゝ近くにある平屋
病院（京都府北桑田郡平屋村）へかつぎこまれ、
その場で手術をうけた。

更に昌久前、内臓破裂である。どるものもとり
あえず、かけつけた家族や知人は、マツチ一本を
するほどの難局であつた、このさんだんたる事実、

の前には、たゞ絶望と悲しみの涙のみであった。

ヘ(1)ク

義宣君のおばあさんである次田妙庵さん（福井山井坂山区幡崎鬼子母神道場主）に、義宣君キトクの心つせふとしたのは、十六日の夜十一時すぎだった。

次田さんは、八月廿二日にして生まじきの入院である。自分の家を蓮島として日夜看護にかかり、四キロほどはなれたところにある巣を「妙法の巣」と名づけて、特別の修行場としているけれど、今までとは、すこく~數十人の尊い人命をお題目のみで殺した。

つてもいる。

義宣君キトクの枕らせ夜受けた次

田さんは、妙法の巣へいく時間もさうして、庭先きの井戸端で水呑をした。一杯、二杯、三杯と水をかむっていると、突然、へ美常寺ショックがあつた。意識でたらせて受けたのだから、義宣君の精神は全然しならなかったが、

へ後更詔をやられだ。

と直感した。さらに、

へ急所をはずれてはいるので、命だけは大丈夫だ。

ヘ(1)ク

とこう確信を、この水呑によつて

十七日ヒ娘のゆくえさん（義宣君の母おはさん）とともに病院へかけつけてみると、義宣君はほうとうひで全身をおい、意識不明のまゝである。

入院してから一度も活動することなく死んでしまったので、腰出はほかにいいところどころで、血がにこみでいる姿は太苦しかったらしい。

△3△

二月四日あさりにわたる大手術の後、手術が大成功でしたか九十九分の一みはかない。もし助かれは奇縁です」と手術室にひらく。

と、いつ大医師の「一ほか、居あわせた人々の耳に、しごりのように残つた。人々は、「んどは沢田さんと、外専専門医ほか二名で、外科として日本平尾病院はじまって以来の大手術をやつて下さい」と困る時の神とのみである。

沢田さんとしても、命だけは大丈

夫と確信はしていたものの、やはり人

間、義宣君のしたくしい姿を眼の

まえた、医師から「九十九%みこみ

（ひじ）といわれてしまつては、医

師が最後にさつた「助かれは奇蹟」

（ひじ）ことほんたどるほか進むない。

お題目一すじに生きて来て来た沢田さ

んである。そのお題目は、本所紹興

が末法のわれらた是好良葉として妙

法五字・七字のうちに一つ、み遣され

たものである。日蓮聖人は「法華経の持

者の祈りと祈りの叶わぬことはなし」とまでいわれている。

へもし、ここで義宣君を放つことが

-25-

できぬいようだつたら、何がための
難尊か✓

へ何がためのお題目か✓

へいや、自分の信仰がまちがつてい
るのか✓

へ自分が法華經の行者でないのか✓

沢田さん曰自分をせめた。もし自

分の信仰がまちがつていれば、義宣

君を救へないのみならず、法華經に

あだとなしてしまうのである。こう

して沢田さんは、

へ自分の信仰によつて、必ず義宣君

をも、法華經をも、生きなくては

ならない✓

と心に誓つた。

義宣君の意識は一向に回復しそう

状態がつづいた。

もなく、二十日には膀胱を併発して

へ▲▼

しまった。全身十数ヶ所に、一日二十貫余の冰を使って冷しても熱は四十度近くある。医師は「今後がやまだ」というし、院内は異様な空気につづけられた。

その後、沢田さんとゆくえさんは、全身のほつたいたからとりのこされていだ両手のひらと口づけて、体内に吹きこむかのよつてあ自我喝五百巻を誦し、暗黙で一夜を明した。

二十一日の晩ころたむつてようやく熱は引き、義宣君も多少おちついだが、相変わらず意識不明の一んすいられほつたとして使われた。

一方義宣君は、全く時を同じくして左後頭部が化膿し、三回目の手術を行つたのだ。手術は成功した。この麻酔行に使われたサラシは病院へとさり

山陰に位する福知山の山間では、九月ともなれば、お滝の水はつめない。日に九回も滝につかるのは、けつしてうへき口ない。

だが沢田さんは、なんとしても義宣君を放つてやらなくては、とい

う一念がある。だから来る日も来る日も水行を続ける。しかし京都からは一首とも詔書はこない。御夷らす意みされながら、幽夜にかすかにともるとおしひをみつめるようだ。義宣君の意識が回復してくれることのみで、むしろ、看護はた看護で開けてくれていた。しかし義宣君はうわくと一つしわせいのである。

こうして意識不明のまゝ、董吉たはつくせる不安な日が四十日、四十日と過ぎていった。

→5←

この中のまゝは

まだ十八才という娘の「みみさん」が

近くの居者さんを集めて、これまた

毎晩で祈っていた。

病院で口、両親が深い悲しみにつ

絶対的信による祈りは

沢田さん一家の、

病院で口、両親が深い悲しみにつ

松天とは通じないのだろうか。

しかし十月一日、ついに義宣君はうわごとをいいたのである。五日には、お母さんが、そつと口に入れてくれた小指の先ほどのパンをたべただである。意識が回復したはじめの

日。お父さんが「義宣」と呼べば義宣」と同じことながらいえるようだなう、やがて「ヨシ」と返事ができるようになった。

意識を失つてから六十日目の十月

十五日は、「

「お父さん」

と自分からいきつた。

奇蹟だ！――――――。

本当に奇蹟的に義宣君は、意識を回復したのだ。意識をやぶつに天の光は、さんせんとして義宣君の上にかがやいたのである。このときの両親をはじめ沢田さんたちの喜びはいかばかりであつたろう。

身命を賭した両親の看病と沢田さんたちの祈り……それは、全く人間の限界を超越して、義宣君大法華経の恩好良薬をのましめたのだ。大

日蓮聖人曰身延山に入られてから自身の半生をふりかえって、

二十八年が間、また他事をなし、妙法蓮華經の七字五字を

日本国的一切衆生の口に

入れんとはけもはかりなり。

此れ御ち母の赤子の口に

乳を入れんとはや慈悲なり

「法華經の行者の心魔を発露され

てゐるではないか……」

（6）

今、義宣君は病院で、爾親についた
その代りから、歩く練習と手念がな
ど、しかし止日日家へ歸つて迎える
ことができるそうだ。

又にね、まあ、一ひとをかくしきれず

に次田さんが語る、義宣君意識回復
のエピソードのいくつめである。

ある日、義宣君が直義易さんと向

へて、

「どうも長い間お世話をなつたなあ、
おつきだ」

といつた。すると直義易さんは、
「あなたた、おつきだといつてもら
えるとは思ひませんでした。本当に
夢のよみです」

と、わが「このよみこよみ」といふことを
いた。

まだある時、鹿長さんによつて、
「僕は絶対に死とまことに、僕には
絶対に助けてくれるおはおさんがあつ
いているんですから」

と自身満々に語り、鹿長さんを苦
笑させた」とある。

またあるときは、

「退院したら高知山へ行って、お意に入らなくては――」

とか、

「身延山へも、お詫せりといひ方へては――」

「退院したらいそがしいぞ」

などとじつて、早くも退院してからのことと想みては、希望にみちていた。

最後に沢田さん曰

「あの子は以前より、しつかりしましたよ」

と、ようこひのことをちらしていた。

『感謝感謝できる者の幸と

して私はあなたと対して、

「何とも感謝せよ・感謝する心をも。恩をうけたうえで返せ」

と申しあげるのでござりません。

そつこは藝術的なことではなくて、むしろ個人的な感謝することが出来る者の身の事やと思う、そつこへたがれんことをお願いするゆゑでございます。

太陽の光たる一杯の木たる恩をおも正在する芝生の草たる何かのものと恩を感じて、その恩に報へようとする人の顔、その顔は何時もさしく輝いてゐるもので、それは謙虚な輝きであります。

昔、中インドのクシナガラ城の町に百二十才になるスパドラという薬者がいました。二月十五日の夜半お浴迦さまが城外のキレン河のほとり、沙羅樹の林の中で創入滅されると聞いて駆けつけ、一吉の教えを乞いました。お浴迦さまは驚かたとされました。

「スパドラよ、人々は薬にてて苦があり、薬が尽きたことによって苦も尽きると思つてゐる。然し実はそうではないのだ。苦は煩惱より起り、煩惱は無用より起る。無用とは仏知を期せんとしていることである。」

スパドラは歎息しました。そしてその場でお浴迦さまの弟子となりました。これがお浴迦さま八十年の生涯における最後の仏弟子でした。

苦業と知仏

身延山大学三耳 藤森觀家

スパドラよ、若し薬の因縁を断つことによって仏知が博られるとするならば恐らく仏知を得る聖者は一人としていなさる。何故なら人間の薬よりものは始める終りもないからである。

スパドラよ、苦し苦行によつて仏が得られるとするならば、すべての畜生をすら仏知を得ることが出来るであろう。

スパドラよ、苦行を要わず、業滅を先とせず、ひだすら仏知を求めるがよい。それが仏者の道である。」

スパドラは歎息しました。そしてその場でお浴迦さまの弟子となりました。これがお浴迦さま八十年の生涯における最後の仏弟子でした。

我が出家の動機

お題目は生きている

お釈迦さまの云く

法によって人によることなれ
自らをより外とし自らをばせよ。

身延山大学三井
渾 漢 雅 豊

11

私は昭和十七年十一月二十三日、愛知県外今市
の豊田自動織機会社の社宅で生まれました。父は浜
島善三郎、母はスミ、亡くなつて長男は豊、次男
は邦博、姉は孝子で私は三男、宣夫といひました。
母は日蓮宗の熱心な信者でした、いは熱心とい
うも過か、さながら鋼鉄のよつた信仰をもつてい
ました。柔和な細い体をして母の何処ど、そのよ
うな強烈な信仰がひそんでいるのか、むしろ不思
議に思われるくらいでした。

もの心をおぼえる頃から私は、邦博兄さんや孝
子姉さんと共に、お題目を唱えさせてられました。
朝と夕方は勿論のこと、食事の前でも、学校へ行
く時帰つた時、そして遊びに行く時でも帰つた時

でも、何かたつけ、ぬす御仏道に手をおわせてお題目を唱えるよつとしつけられました。若しそれをちよど

とも欠かしたならば、御飯をたべさせない、といふ義じやうとした。

事実深い夕飯の食卓につけず、

かくしあうな御飯めらべられず、廊下のすみ、庭のすみにたゞすんで空腹をかえながら、シカへ泣いていたのも再三のことではありますん

でした。

おでこのお友だちと遊び疲れて帰つた夜でも書體修行の時間ともなれば、その間は、足と足がしなれて立てなくなつても、正坐したまゝ、大

音声に、お題目を唱えていなければなりませんでして。

苦し腰を崩したり、声を低くしり或は居眠りでもしようものなら、やぐわに木枕のパイが頭へ飛んで来たものでした。

幼い日の頃、子供心にも、

へこれか自分を生んだ親なのかな

と反発し、いくたび親をうらんだことか知れません。また何度も、家出しようかと思つたか知れないほどでした。

然し、こと信仰に關しなければ、日常のすべてにおいて父は理解ある父であり、母も柔しい母だった

のです。

へで日一旦・信仰のことになると
いつとれで人間とも變つたかのよう
に何故、このようだ歎しくなるのか
？…また歎しくしなければならぬい
のか／＼当時の私に知らうはずはない
ませんでした。

然し、成長するに従つて母のこの
ような歎しいつけは、三宝諸天の
駄大な仏龕を日々夜々、じかに肌身
に感すればこそ加護をうけている家
族のすべての者が、こきつて報恩の
誠を捧げねばならないといふ、やむ
にやまれぬ感謝の心と、一世の中で、何
せざしおいても最も尊い法華經の信

仰を覆する我が子供たちと正しく伝
えねはならぬと、いう親心と、も
とすくものであつたといふことか、
おぼろけるがらにも感ぜられるよう
になつて來たのです。

そして日蓮聖人の伝記や、その直
弟子の達翁などと並んでり育いたり
する中で、「正教導尊」という教えを
知るに及んで、今さらながら父母の
信仰実践の尊さと心うたれずにはお
れないと想ひをしてことでした。

2

建治二年二月、老いた内房の尼御
前が、氏神を参拝したついでに身延

山に参詣一歩一歩の苦、曰苦難

「無事所定なり。法華經は主君なり。新從のついでたと西への見参なり。世間とも恐れ候」

「画忌は一だひあつて手戴を待つとも
来らず、身は六老僧の一人、真前弘
法寺の山主、宗門の柱、信徒の鏡、
しむるを宗祖の報恩法要に星参する
不孝の罪は赦し難」

と面会も許さず、そのまゝ、遅い返してしまつたのでした。一のまかで解の湯のついで、参籠しに幾多の夜未とも同様に追いつ度えられていました。
まだ大老曾日廣上人は、弘安七年十月、たゞ一人鎌倉において他宗との法輪をさきなくされたため、日蓮聖人の三國忌法要に選參しました。

と、その場で翻訳したものが、それより日本人に日本文版、一體もセイ座の新作の本のうちの一つとなり、此正義翁の政治小説を翻譯しつつ血の涙を流して繰返しオした。今にし残る中山法華正寺境内の哭銀杏がそれです。然し動物は殺されませぬ」と、

「の時、父の富木日常上人は、「法輪は日蓮以下の大師の」と、三

永仁七年三月二十日、高木曰常上
人は八十歳でなくなりましたが、

その直前六毛僧の日船上人と日闇上人が口をそろえて勘定帳免を乞いました。日闇上人は着ていて脱着をぬいで日闇上人へ渡すよつた慶外ました。然し

「日闇一人を救はば千載大厚の資

を蒙る大辱」

と次を耳え言ひてくじにほつて遂に勧當には致しました。その後日闇上人は真向の弘法寺を弟子の日場上人に説き身は高士の麻籠へ起して、六老僧日興上人の奨学、布教を助けました。

然し父日闇上人が勧當を救ひなかつた心を体して終生人の表に立つこ

ともなく、筆もどらず、日蓮聖人より度いた直接の大マンタラ御本尊さえも、身に所持する一とをつゝしんを日闇上人あすけられていたほどでし。

さて日闇上人の弟子日闇上人は、講義を聽きながら風に散る庭の梨の木の葉をさらりと裏ました。その刹那、「普遍の講義ならは忌き角も、今のは無義江宗祖の御靈文。かくみするとは宗祖に対する不孝の振舞い」とその邊で義経されました。日尊上人は歎息のあまり自決しようとしました。その時、ふと思ひ返しました。そして死んだつもりで、果しな

た・そして死んだつもりで、果しな

き行教の旗へ出ました。

然し毎年の舞会式人は、何処からともなく必ず馬つて来ましに。そして義絶された身であれば本堂の前の庭石に坐つて一枚を繞るで聞していましました。

或る年の御会式、それは寒い夜でした。日興上人は便りを置わして日尊二人、正座式ミヌエーションの時曰尊二人は、「
「舞はぬ」とかの如くの真じに正座を竟じて歌を詠じた。夜は寒くとも御前直に歌の意こそ温い」

と、正座を覆ふに押し直したま

一枚を聞きました。

かくして前後十二年、全国に三十ヶ寺を建立して、はじめて義絶は解かれ帰山が許されました。

そしてその時がなくて風の便りに日尊上人が寺を暮すことに寄りて、日興二人がこの二年間ひそかに、したるおれでこにスマンダラ三十六幅が一度に残存され、それがこの寺に勧請されたのです。

富士の北山本門寺の境内には日尊上人の梨の木と縁掛け石が、今なお昔の面影を留めています。

(3)

おことじに公道は「布袋道尊」でな

ければなりません。而歎道尊なれば
こそ法が人によつてゆがめられるこ
となく、正法は正法のまゝに興隆し
て行くのでありきしよう。

母の私にちく対するしつけの嚴し
さも、これら先帝の嚴したことからぶ
れは物の数ともへらないことです。

へ然し、それにして母が、私た
ちに對して厳しくしつけざるを得な
か、た所成の法華空の尊ことを、母は

かく、
それを母がみすかう私に物語つて
くれたのは、私が中学校へ入學した
頃のことでした。

母のこの物語りは、母の入信の動
機となつた父の大病から始まつて、母
の信仰を更に強烈なものとして豊兄
さんの死まで私が死後十時前も過
してから蘇生したこと、いつせても不思議
で驚異に満ちて及ぶものです。そして
この物語りが、そのまゝ私の出家の
動機たつらとなって行くのです。

4

私の父は、明治三十二年、曹洞系
の達を信する家庭に生れ、母は明治
三十七年本願寺系の念佛を信する家
庭に生れました。そして双方の実家
はそれ／＼家代々の尊信の信仰にこ

りかたせつてござした。

前にも述べましたように私たちは

父の薬局自動織機会社の社宅に住

み父はその会社につとめていました。

昭和六年父は三十九歳の耳、わけ

のわからぬ病氣にかかりました。

医師とも何の商量も取らなかった。病

気の状況も全く想像のしようが
あつませんでした。

家の出入りが少しあって、床敷物の
ほか食べるものが食べられず、父は
毎日三回に薬局と医者を替え、病院
を替えてと結果は同じことをしました。
先きの見通しは全くなく、ただ、流

動物と医者が注射する栄養剤だけと
いう全く頗りにものならぬ健康的の用
日が過ぎました。

この両母は二十七才、六つとなる
長男の豊次さんと、三つとなる次男
の邦博さんとさかえ遠方に書れ
ていました。せめてこの奈良の風に
つや巻でわざとほーの母の母のこ
とでした。

薬局へも医者へも、みな
通りにならぬ、朝から晩まで一日中
つきそつとして、も看病うしに看病を
怠すことすら出来ず、やせおとろえ
たま、たゞ病床に死期をむづばかり
のあわれな父の姿を眼の前にしてい

れは、もはやすがる所日神・仏のは
かはありませんでした。

母は恥も外聞もなくそれこそ苦し
い時の神にのみ、迷える者はワラを
もつかを思いで、村はずれの神社に
日参してはお百度をふみました。ま

た祈禱するお寺があるといえは、ど
んなに遠い所でもたずねて行きまし
た。祈禱行者がいると聞けばどんな
裏町の露路へでも通いました。

もはや近郊近在にか、ら百いとい
う医者はなく、行かないというお寺
やお宮もなく通わないという祈禱所
とてありませんでした。

然し父の病状は少しも毎晩する気

配すらなくじりくと悪化するばかり
でした。疲れ果てた母は、生きる
望みも失い妻子とも一家心中を
しようと考えたことも屡々のことでは
ありませんでした。こうして五年
の歳月が流れて行きました。

昭和十一年、父が三十六才、母が
三十九才の或る日、一人の旅者が家
の門口に立ちました。それは物凄く
みすぼらしい姿をしたお坊さんでした。
お坊さんは母に向つて、

「毎日朝夕は必ず御仏殿にお灯明
と三本のお線香をあけなさい。そし
て一心にお題目を唱えなさい」

とただその一言だけを言い残すや、

そのまま立ち去つて行きました

した。

疲労と絶望にうちひしがれていた母には、旅館の姿は如何にみすぼらしくとも、この声はまさしく天の声の如くに聞えました。といつのは、それまで五ヶ年もの間、如何に死にものぐるいと教いを求めてたとはいへそれは悉く外へ求めたものであり、みずから内へ求めたものではなかつたからです。

お漬物(さけ)は御入藏に当つて、

「法によつて人による」となればみずからより処どし・みずからを咎とせよ」

と遺言されました。

おおうそかにして外にはかりぬをそつき、人をより處として自らをより処とせず、人を灯として自らを灯としなかつたあやまりに気が付いた母は、たゞお題目は生れて初めて曾えるお題目であつてもまだお題目がどういつ意味のものであるかといふことヤス判らなくて、天の声と廟(廟)はこそ、これこそ一家を救うために、天より与えられた唯一つの道と信じました。

母は召えました。長男にも次男にも聞えさせました。今が今まで私娘の尊靈に心をこめていたか、た罪を

懺悔し言われに通り、お灯明と三本のお線香をあげ、肩ゆる環もなく朝も晩も夜もたゞ一心不乱にお題目を唱え続けました。

それは唱題が始まってから二十一日目の朝のことでした。母が病院へ墨舞に行くや、

「おい、起きたいから起き」

と父が言つたのです。母は電気につながれたらすぐに立ちすくみました。

六年間の血みどろの折りが、今この一言の声となつて答えられたのです。溌漫とあふる、涙が、母の頬をぬらしました。それは感動と歎美と感嘆の涙でした。

その後、父は禪の数珠を断ち、母は念佛の数珠を切り、一家をあげて法華經の信仰へ入つたことはいうまでもありません。

そして数年ぶりに家の内にも、蘭らかな笑い声が起り聞るいお題目の

方が、朝に夕に駆けて来るようになつて来たのでした。

然し、この走りも束の間、長男の喜多さんがあ急逝するという、不幸がふさいで、つづく来ようとは、神ならぬ事のなる由もありませんでした。

次号が江蘇の動機

「お讀書の生きている」は長文のために次号に継ぎますが、次号は筆者浜島君が六つの年、死後十時間も至過した後、奇蹟的に死體から蘇生して生々しい体験談をひいて完結します。

編集部

III 紀行九州街頭布教の実況

本日夕頃正月冬休みを返上した身延山学生有志は、や五次身延山布教別動隊として正月四日より九日にかけて福岡県下の主要都市と熊本市において総力を結集して現地寺院・信徒と共に新香を飾る堂々たる御香炉を展開して正月平和と創価学会折伏を勧告。更に正月十四日の本尊遷御祭典の三禮にて田蓮宗と創価学会を対比批判する熊本寺耳共學講習会を開催、予想以上の大盛況をあげて正月十二日無事身延山帰山しました。

この街頭布教現地の実況とその反響は

次月号にあわせて掲載いたします。



王舍城と五大山

象

白 高

呼はれ、畫跡はバトナの南方ビハール州に残っていますが、その起源については、次のように伝えられています。

孫悟空と有名な西遊記の物語は、玄奘、三藏が中国より印度ヒンドキで仏教を求めて行つた大唐西遊記タカニシヨウジといふ旅行記を原本としたものですが、その大唐西遊記によれば、

マガタの国王ビンビサーラ大王は、はじめクサーラアタという上茅宮城を都としていました。たまく城中の市街に火事が頻々として起りました。大王は、

「今度、失火した者は、例外なく城外の寒村へ逐す」

と、國民に嚴命しました。ところが事もあろうと王宮より失火してしまいました。そこで大王は、みずから城外へ出、外敵の来襲にそなえるためとも、五つの山にかこまれ

王舍城の起源

兵舎地を送んで、王宮を建て城を築きました。これよりマガタの都を王舎城と呼ぶようになったということです。

また龍樹があらわした大智度論によれば、上茅宮城の出火が七度にも及び、それ以上、出火が続いては国民に蠹害が建の勞に倦み、國力も疲弊するところからこの地を送んで都を遷したという、ことになつております。

なお大智度論には、次のような著説もかげてきます。勿論、後世粉飾された伝説ではありますけれども

マガタの或る国王に、一面兩面四

~45~

も面白い子供が生れたのですね）
国王はこれを不祥と嫌つて王子を駆逐に棄てました。ところがこの王子が後に天下を統へし、諸国の王一万八千人を庸勇として、この五つの山にかこまれた中に幽閉してしまいました。そこで人々がこの地を王舎城と呼ぶようになったということです。
おそらくこの伝説は、ピンヒサー・ラ大王の王子阿闍世が、父王を幽閉して新王になつたこととヒントを得た後世の作りごとであります。

もう一つの伝説といふのは、マガタの国王が農業中、たまく

五つの山だから、まれに土地を見て、さながら堅牢な天然の城塞と感じて都を造つた、め、王舍城と呼ぶようになつたということです。

この伝説には、前に述べた出火というような理由はありませんが、それとしても、もつともな伝説でありましょう。

最後に、もう一つの伝説というのはマガタの國に婆羅王という国王がいました。国王には広車王という王子がいました。王子は出家修行をするのをふさわしい土地を探し求めていました。その中、五つの山だからこれまで境内に、清涼な池があり、温泉

も湧き出でている风光明媚な盆地を見し父王に報告しました。すると父王はこの地を出家修行の地とするよりもむしろ都にふさわしいと思い、かつてこの都を王舍城と呼ぶようになつたということです。

もとより伝説ですから婆羅王とか広車王子といふ人物が実在しまわなければなりません。然し盆地には今日なお池があり、温泉も昔のまゝ自然に湧き出でているのは事実です。

おそらくこの伝説も王舍城が出家修行にふさわしい土地柄であつたと

いうこと、また王舍城の附近には

多くの修行者が集つていたという事実にもとづいて、後世このようだ考え出されたものであります。

なお善見律毘婆沙論の中には、王舍城の名称に關して、

「この國は、苦し仏出世の時及び
転輪聖三寶は、この惑々として、國土とな
ず。若し聖人出世することなくん
ば、この地は波叉の主となるん」

といふ語が記されています。刻ち、
仏陀や転輪聖王（仏陀）を參し、仏
法をもつて天下を統治する偉大な國
王（お世に出現する時は、必ず王舍
城を都として、その國土を淨仏國土
とするであろう。然し、そういう聖

者が出現しなければ、云々三舍城
といえども、聖者た代って夜叉惡靈
の支配する所となるであろうとの事です。
もちろんこの説は、お蒙遊さまが
帰りを崩かれて以来、主として王舍
城を中心と正法を宣傳されたという
事実、ならびに仏教に轉接したコン
ビネーションが三舍城を都として善
教を傳したという事実、そしてお蒙
遊さまがなくなりれ、コンビネーション
大王も全くなられに後、さすがの王
舍城も、いくはくもなくして荒廃し

こうした事実にもとづいて、後世こ
のように考証的に言われるようにな

つたのであります。

ちなみに戦国でも今日なお曰蓮宗の信者の家の門口に「南無妙法蓮華經・王舍城」というお守札が懸け

られてゐるのを屡々みかけることがあります。このお守札は、法華經を信仰する者の家が、あたりもお説

説さきやビンビサーラ大王在世当時の、王舍城の如きものであると、少々余談になつてしまひ、以上が王舍城の起源に関する諸説の概要です。蓋し、そのいずれにしましても王舍城は、初期の南方仏教經典中たゞ、

堅固不退の信仰を明示することによつて善神の衆集と、悪鬼惡靈の退散を祈るものとされてゐるものです。然し、このお守札が、お説さきである以上、ただ単に新舊的な意味

だけでなく、少くとも日常生活における法華經実踐を表明するものでなければならない。ということは申すまでもありません。

少々余談になつてしまひ、以上が王舍城の起源に関する諸説の概要です。蓋し、そのいずれにしましても王舍城は、初期の南方仏教經典中たゞ、

「五つの山にかこまれた古い都」と、しるされてゐるようだ、五つの山にかこまれた天然の要害であり、池あり温泉あり、都としてもまた修業地としても最適の所であつたのでした。

王舎城と五大山

王舎城を「五大山」といつの

日本門から西門にかけて方広山（ヒラヤマ）・西門から南門にかけて
黄金山（クナ・ヤマ）、南門から東門にかけて萬葉山（ワタヤ・ヤマ）、
東門から北門にかけて薫葉山（ヤシマタ）・北門から南門にかけて
マタタバ）とつぶやく萬葉山（ラタナギリー）

一の五つの山々は通常、五大山と
総称されてしまいますが、その高さは、
いずれも地表平均およそ三百メートル
・南北と東西とで、都を山ふところに
いだくように連ってして、外敵の侵

入を防ぐには、あつらえむきの天然
の要害となつてゐたのです。

その上、五大山の廢すたいには、
川ながら中國の裏室の長城のよう
に築かれた城壁本、天にそびえるよう
にのべられ、また盆地の市街周囲
には、更に内側の城壁が、山裾の平
地を越してのびる壁をつじたて
かかるように築造されていました。

山麓をのぞみます外城の面では、東
西南北を五キロ、南北を約三八キロ
あたる衝突とのぐらす内城の面では、
東西およそ二キロ、南北およそ四キ
ロ、南北と東西とで、都を山ふところに
いだくように連ってして、外敵の侵

-50-

文字通りインドの薬国マガタの首都としてその国威と繁榮を誇っていたのです。

今日、その城壁は、見る影もなく崩れ落ちてはいますが、それでも城壁の遺跡は、序お何んに残っています。

また大唐西遊記によれば、玄奘三藏が王舍城の遺跡を訪ねた当時、その城外周辺に、仏陀伐那山、絞林、二溫泉伏醉象塔、阿彌陀持秘密說法丸、室利毘多火坑、特舞迦大匡王堂、翠鉢羅石室、提婆達多入定石室、自殺比丘塔、迦蘭陀竹園、仏舍利塔、

蔚陀池、無憂王石柱、等々の仏教遺跡があつたことを克明に記しているが、その中、今日なお残っているものもあるほどです。

さて五大山の中の方本山というのにお馳迎こまく方広大莊義修を説かれて山とよいわれ、山裏奥ぞ門が外には仏教最初の寺鬼牛放縛寺のあとがあり、また山中に古び葉窟跡や事鉢羅石窟があり、お駒迎こま御入滅直後、王舍城の阿闍世王が施主となり、大迦葉が首座となつて經典の第一結集がなされたのも、この山といわれています。

次に黄金山といふのは、東方の高

阿難半身舍利塔、オ一結集石室、迦

起山がへ太陽の昇る山／という意味であるところからすれば高起山に射し

昇る旭日によって、黄金のように輝く山という意味でもありましようか。その山麓、西門郊外には、ビンビンバラズニがお隣地を出て迎えて入居したと伝えられる数株跡があります。

次に高起山の麓には、南門の内側附近に、舍利弗が仏教に帰依したと伝えられる跡があり、また、東門内側の山麓には、靈鷲山と対して一つの池があります。

この池は、前に述べた大智度論の伝説の中の池でもあり、また大唐西

城記の中の迦蘭陀池と「うのも」ことの池のことでありましょうか。

池には、靈鷲山のオ一峰と多宝山の谷間より、流れがそき込んでおり、更に池の水は川となるて、靈鷲山と靈鷲山の麓をめぐりつゝ、王舍城の方剣城壁の外にそって、北門へと流れています。



講演後所感

無量義は 一法より生ず

横浜市 田中寅輔

鷺峰正月号を拝見しました。そして日高白象師の「印度の靈鷲山と日本の身延山」と題する、釈尊とビンバ・ラハ王の物語と、身延山大学二年木村義賀君の「祖廟に祈る」と題する、身延河の寒流に身を投じた木行の記事とを比較し、前者は知よりの精進を表とし、後者は行よりの精進を表とした、対照的なものとし

て考えてみました。

私たち講妙会の恩師、故井上清純先生は過去数十年來、その生涯を通じて日蓮教学の中に最も重著これまでいる法華経思想——それはたゞ單に教義、教理の傳達するのみでなく個人的、社会的、芸術的として国際的大潮上すべての思潮、思想、主義、文化の悉くを、久遠の本仏教尊を中心として用盡統一するものとして説きあわされて来ました。

私たちは社会人として在家のまゝ、たゞ一般社会思想を開会しなければならぬといふ立場から、法華経の教義を探求しつゝ、知の精進をつづけ

て来ました。時に「祖廟に祈る」の
詔書は、往々の精進の尊びを強く感じ
しめるものはありませんでした。

もとより「國家は天下なり、在家は知
行なり」というので口もなく知行を伴
い行は知と伴つて事の本體の如く施行
一貫してなければなりません。教導
は「無量義」「法より生ず」と宣言
されて、その「法による法華経を説説」
されました。法華経、こそ知行一致の一
法であり、本仏教尊の因行果徳の二
法、無上真実の一途であります。

仏門に入られた若き青年僧は、まさ
しく海上甚深微妙の法華、限りなき
未知の宝庫に入られたのです。

どうか今まで見聞された政治、社会
の林相またはその思想的見解ことら
われる、ことなく、或はそれ至足ばかり
とする事なく、むしろそういうものを
脱き捨て、かにかくに無量義をあら
しめる一法たる法華経の醍醐味を修
證し而して「方法」を廻会されます。
こうして学生の身といえども「法華
経の行者」(法華經の實行者)の證善に
裏切られ左舌にされる、ことなくひたす
らに希望、「道を精進」されますよう身
延山薦峰会と薦峰の今後の発展の大い
なる希望と期待を寄せ、切に御鞭撻を
祈つてやまないものであります。

〔筆者付 講師会員 医者〕

信仰相談室

創価学会はどうなるか



創価学会の動向と、日蓮宗
青年運動の在り方 (続編)

解答その2 日高白象

これは新年号に

一、創価学会は、今後どのようにして行く
のであろうか?

二、日蓮宗の青年運動は、如何に在るべきで
あろうか?

と掲載され、二つの質問に対する解答のつ
づきであります。

C

さきに新年号では、日蓮宗宗務院の新規
宗教対策委員会の一員である竹内泰存氏の
「創価学会の今後の動向」とに対する所見を
御紹介いたしました。

今、これを要約しますれば、

一、創価学会が王仏冥合・オミ文明を旗印
として富士大石寺に國家国立戒壇を建立し

ようとして前進している以上、その政治的進出は、必ず衆議院の議席をもねらって、萬全の体制を整えて行くであろう。

二、またこのため昭和三十八年度の方針として全会員の教學武装を整え、創価学会は、今後、数学的価値批判を主眼とした立場より飛躍して、むしろ実践的価値批判を主眼とした布教を展開して行くであろう。

といふことをして、要するに竹内師の予想では、

「三百万世帯、ないし四百万世帯にふくれあがった創価学会は、教學武装を通して内を固めつゝ、外部へ

向つては、教學的斗争よりも信仰実成態度をもつて心臓としめる布教方策を主眼とし、大も寺國立、成田建立に向つて前進する過程として、必ず衆議院へ進出して行くであろう」と

というのです。蓋し竹内師のこの予想は、大いに懷疑すべきものがあると思ひます。

学会の底辺は、庶民利益の信仰につられた愚昧な民衆です。この民衆が急激に三百万世帯までにもふくれあがつて来ました。ところがその信仰が、離合集散しやすく低級な現世

裏、崩壊は火を吹くより明かなどころでした。

然るに学会の急激な膨脹は、実は会員の一人一人が、生かじりの数学を第一とし、利益を目的として、必ずりう折状と称する名で神いつゝ、学会以外のすべての者を悉く愚口難言することとするものでした。

そこで学会は、本邦発展の立場にまでふくれあがつた全学会員に対しても如何にも他宗を更に進歩擴大するかのように、よそがいつゝ数学武装といふ新筋を构造、教授、助教授、編集、助師という進級制度までもつけて、数学振兴を激励しました。

会員は数学武装という名で醉い、大學後陣のみの階級に魅せられて、競つて大石寺数学の精神に没頭して行きました。

ところが此の数学武装するものが実は内部崩壊を因縁として内部をかためるに同歸し、他の数学思想をかれりみる暇さえ与えず、又で自分へしされた辱罵のように、学会数学一本格に固める政策であつた、ということはきつまであります。

昭和三十八年、会員の李政的布教をおさえた数学武装政策は終りました。学会は崩壊の危機を因縁し、数学振兴制度を通して中堅的会員の

層を掌握しました。そしてその層が、
青年行動隊を中心とする層につらな
く行つたことは蓋し必然的勢いで
ありますよ。

結局、教學武裝は、学会の李教員
が外部へのひろがりをおさえ、崩壊
の危機を回避しながら、却つて内部
において学会の親衛隊ともいふべき
七十万青年行動隊を、百万になんな
んとする勢力にまで拡充して行つた
のです。

ところで学会が今後においても武
装した教學をもつて、従前のように
或は従前よりも増して、猛然と折伏
論争を開闢するかと申しますと決し

てそうではないのです。

若し、そういうことをすれば、

三百万世帯を獲得した当初のよつな
飽和状態というよりもむしろ收拾の
つかない混乱状態をみずから招き起
す者が充分にあるからです。その
時は、教學武裝をしているだけに最
早これとくことめる何ものもありま
せん。

きたさういうことをすれば、ぜつ
がく目かくとして来た会員に、教學
論争を通して、学会教學と他の教學
思想と対比する機會を与えると共に、
外部よりも教學的批難改善をつけ、
これまでつゝみかくとして来た大石寺

58
教学の多くの誤謬や矛盾を白曰下にさらけ出してしまったのがあります。

このことは既に学会幹部が屡々犯して来たことがあります。

そこで学会員は、学会員に対するめかくし武蔵の政学と金科玉條の如く思ひこなせつ、教学的価値批判の立場から、実践的価値批判の立場へ教学的斗争よりも信仰実践態度をもつて他を心服せしめるといったよう直面教方案へと躍進しようとするのです。いな、そさせざるをえなく存つたことありましよう。

もべなるかな、昭和三十八年の教
學武蔵の年も終らんとするに当つて、

会長池田大根は、機関紙「大日蓮華」第十二月号の巻頭言の中に、次の通り指令しました。

「信仰の指導に当たり心すべきことは、真剣なあまり、神圣貞に至つたり、悲愴感をもつたりする必要はない。あくまで自己の人生に及びを感じ、のびくと功德を確信して、指導に当つていたいたいたい・また、しつこい指導は極力させて充分に納得、理解させていけるような黙らず余裕のある指導であつていたいたい」と(以上原文のまゝ)

蓋しこの言葉は、これまでの学会全體が、如何に神圣貞であり、悲愴

御めあり、おしつけがましく、しつ
こらものであつたかといつて下周知
の事実を裏書きするものであると同
時に、一々して政策の行キませりか
ば四十歳の轟櫻をよきよきとされ
ておもひだらるものです。

おひだりて今後における学会は、
往來のよう人にのむく燃えさかりた
きき方より一転して水の如く社会へ
傳播して行き、この流れも、そのま
ま放置しておけば、大河の如きに圧力
をもつて来るであろう、ということ
は容易に予想されましょう。

D

リ「廢される学会」になろうとして
います。然し王松冥合の大石寺國上
城垣建立を期する学会の究極の目的
には、何ら変りはありません。もし
ろ一步でも目的へ前進しようとす
るの政策変更であるだけに、学会
は更に政治進出の歩を固め、学会舞
踏で構成している公明会政治団体も
より一層擴充されて行くであろうこ
とは、火を見るより明かなところで
あります。

こゝた

学会は、必ず衆議院にも進出して
来るであろう

今や学会は「たくまれた学会」よ

~59~

わけです。然し、果して学会が衆議院選挙戦に乗り出して来るかどうか、ということについては、むしろ否定的見解をもつ人もあります。それはどうです。

「衆議院の選挙戦は參議院のそれと連れて全国区ではなく地方区のものである。しかもその地方区には保守・革新の名だたる旧政党人がひしめいている。そのまゝに中に保守と革新ともつかぬ創価学会が割り込んでしまひとも参議院へ進出する」とは非常不思議である。若しあとで勝敗すれば、この一事をもって学会は急遽直下廢滅の危機にさらされる。

このことは外部の者よりも、学会自体が最も承認している口である。従って学会が、昭和三十八年の秋、衆議院選挙に際して小手からへのため参議院議員若干名を立てたことがあつたとしても、幾段階にあつては学会が正面から衆議院戦を行つて出ることになつたことと考えられない」

そこで学会が今後政治的に伸長するに当つて、如何なる方策をもつて島むかといつてなれば、おそらく学会は從来通り衆議院選挙よりも参議院選挙ならびに地方選挙に集中して行き、「こと」に來年五月に迫つていろ参議院選挙には全力を傾注して

現在十五の議席を更に増強して行くことは既至であり、かくの如く学会ならびに公開会の態勢を万全なものとしてはじめて衆議院選挙に打って出るべくと予想されよう。

最近学会の動向は、マスコミにも書かれて、演説講演の教科書も画題にて、公式的によつてひそめた意があります。

然しこれどもって学会が後退したり崩壊しようとしている、等とみなしては大へん不誤りです。

今や学会は、新しい政策のための転換期に入つてゐるのです。そしてその転換は次回の参議院選挙体制確

立たよすが成りされ、成果は參議院議席獲得によって、あらわされる」というべきであります。

また学会の布教戦線とも、従来の前代一辯倒より、裏表、折衷を兼ねあわせた箇の方々のとして展用されて来るべくとしよう。

このことは実は学会の教學、信仰そのものだ、幅がひろげられたことを意味するのです。

下

これまで学会は、報マンガラ一本輪で本尊を統一し、諸天善神、守護神なるものを、むしろ聖母の如く嫌悪し排斥して來ました。

ところが学会自体の政策の転換にともなつて、このようす善神、宇摩神に対する考え方も変つて来ているのであります。『大白蓮華』オ十二月号の第二十七頁には「諸天善神」と題して、「朝の動作のとき、わたくしたちは東の方に向って初座をつとめ、諸天善神に題目の法味をさしあげ、諸天善神がわたくしたちを守つていることとお詫びしてお詫びをいいます。

大梵天王、帝釈天、日天、月天、大明星天、天照大神、八幡などが諸天善神としてスラリ名をつらねていますが、こうした善神が昼夜ひまなく正しい信心を廻んでいろわたくしたちを守つてゐるのです。

とい、ナ羅刹女の誓願まで漏げて、「正しい仏法を信じ修行すれば梵天、帝釈などの諸天善神の加護の効果が盛んになりてわたくしたちの生活は花びとみちた樂しい生活になる」と述べ、最後に白蓮聖人の生涯中にあらわれた善神守護の現証を記しています。その中で、

「それでは、諸天善神とは、いったいどんなものか、といつことが問題になります。梵天、帝釈など、そういう実体があるのかといふことです

「仏法上、諸天善神とは、生命の一分の働きであり、作用なのです」

と自答し、更に、

「仏と神というとてわけをいえは仏が本であり神は末だなりります」

と想定して いますか、その想定は正しくとも日蓮本仏論をたてまえとする学会は、本仏の日蓮聖人が、その生涯であり勢である善神から守護をつけたといふ宗旨の起きてくるのを如何に解決するのでしょうか。

また諸天善神は生命の一分の働きであり作用であるとする学会は、その生命そのものを如何なるものと解釈するのでしょうか。解釈の仕様に

よっては仏教ではなくなってしまうのです。

いずれにしても、「これまで寺靈神を否定し神廟も焼きほらい、氏神にも伊勢の大廟にも参拜を禁じていた学会が、天照大神・八幡大菩薩をはじめ寺靈神信仰を設破するもとうちになるとは、姦陥廟とはいえ、あまりにも甚しい転換であります。

これも正仏冥合の理想達成のためには「愛される学会」とかうんとするにあらわれでもありましょうか。このにも目的のために口手段をえらばず、教学・信仰でこえる手段としていろ学会の霸道性がうかがわれましよう。

～60～
このようだ時、事態に応じて、教
學も信仰も手段政策として変更する
学会は、曾つて先祖の位牌をすら燒
きすぐて暴挙も、そしらぬ顛をして、
やがて先祖の崇拜、有縁無縁の靈と
対する供養を歎欠し、それによる規
證の利益を宣伝するようになること
をしよう。

なんなんとする青年行動隊の、学会
の中核的推進勢は、その霸道的野望
と共に厳しく監視すべきでありまし
ます。

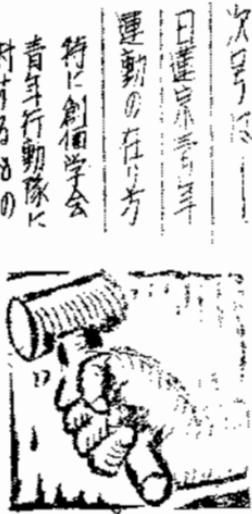
次回は――

こしょう。

こゝに学会が民衆にしかける大き
なワナがあるのです。折伏をうけれ
ば抵抗した人々も、こういうワナに

はかりやすいのではなくでしよう
け。

学会の今後の動向には、油断なら
ないものがあります。ことに百万に



時	第五回身延山青年行学講習会
所	身延山西谷信行道場
賈	三千円(参加自由)
申込	身延山布教部
日	三月廿六・廿七・廿八・廿九(日)三月四日

鷲峰贊助会員会員会員紹介

「鷲峰」は身延山の学生僧が毎月

一回一千部を発行している月刊宗教

誌であつて、全国各宗仏教大学を通じて発行するもので、然し年三回の

休暇を返上した行脚街頭布教による

淨財を資金にあてるだけだ、その運

営は容易なことではありません。

幸い読者皆さまの御理解ある御寄

力によりますして、新年号より購読者

が急増しつゝあり、殊に年間三千円を

御志納下される贊助会員も、毎々増

加しております、身延山鷲峰会學

生一同いよ／＼士氣を鼓舞されていま

す、ここに鷲峰贊助会員の御芳名を

御紹介申し上げ、謹んで感謝の意を表させて願ります。

お本誌が我が国仏教界におけるリーダース・ダイ・ゼストの如く発展いたしますよう、一層の御支援をお願い申上げます。

△ 鷲峰贊助会員（申込願、敬仰賛）

横浜 新川祥司 身延 日高白象

安城 松谷英生 広島 内田尊子

龍野 花房千代 豊橋 石橋明定

奈良 立正蓮山会 東京 中原 啓

東京 曰高江里子 東京 佐久長雄

大阪 赤坂曰孝 奈良 横木蓮子

横浜 小池房三

（昭和十八年十二月三十一日現在）

昭和三十九年第三卷・第ニ号

通巻第十七号

① 鶯鷺山と身延山。② 唐柳相談室。③

我が出家の勧懲。④ デクノボウの祈り

▲ 小さな本誌、せめて連載ものは二つ
まで、とは思いながらも、ついへその倍、

▲ 法華經義の連載が始つたら本誌は
連載するめになってしまつ、とボヤク
学生編集員もいる。▲ かと思うとガリ
パン印刷だから字が大きすぎて豪蕪が入り

身延山鳥峰会

電話身延山二番三番
郵便局(田舎)二十九三番

切れない、活版印刷だったら大丈夫だ、とつ
とぶく者もいる。▲ 四十四頁の予定数が超
過すれば郵送料の一冊二十円。▲ とおもへ
る早く活版印刷が出来るようになると

とですわ。▲ 読者の協賛力、持つや切々。

定期 五十円(半共)

定期

定期

昭和三十九年二月一日

定期

定期 白象

定期 田舎市橋町六天野書寫堂
発行所 山梨県身延町身延山久遠寺内

定期 半年

定期 三〇〇円(半共)

定期 一年 三〇〇円(分納可)

定期